

南廉平と南薫造について

南家系図 〇（本家）—啓造（医師）—薫造（画家）

〇（分家）—環（商人）—廉平（牧師）

「広島教会百二十年史」に書きそびれたことは多々ありますが、広島教会出身で植村正久の後を受けて富士見町教会の牧師になった南 廉平について書き落としたことは大きなミスでした。

南 廉平は明治25（1892）年5月25日広島一中3年の時第6代牧師留川一路より洗礼を受け、中学時代既にキリスト教宣教の志を与えられたとのことです。彼は伊予の占部（うらべ）家の産で、幼時親戚筋の芸州南家の養子となり、養父南 環の安原から広島への移住に伴い、小学中学時代を広島で過ごしました。養父は彼に軍人または官吏になることを期待したのですが、彼は上京して明治学院に学び、そのころ友人に連れられて行った富士見町教会で植村正久と出会い、その強烈な感化を受けて伝道師たらんと志を固め、アメリカのオーバーン神学校に留学します。最初反対していた養父も折れ、妻サホヨと共に明治29（1896）年5月に第7代牧師和知牧太より洗礼を受け、息子の志を支援することになります。養母は後に口癖のように「神様はどうとう廉平を伝道者になさいました」と語っていたそうです。養父南 環は「百二十年史」資料編の年表によると、受洗後6,7年に亘り連続して広島教会の長老になっています。

折しも安浦の本家筋の医師南啓造の息子薫造が広島一中に入学し、環の家に下宿します。その薫造に対しても廉平の影響力は強く、彼も環よりも1年遅れて明治30（1897）年8月に和知牧師より洗礼を受けています。廉平に連れられて行った広島教会で薫造は生まれて初めて西洋の油絵を目にし、自分もこのような絵を描きたいと画家を志すことになります。いつ誰が持ち込んだのか、またどのような絵であったのか、今は知る由もありませんが、そのころ、一人の少年の一生を決定するような絵が教会の壁にかかっていたとは興味深いことです。安浦の父親は当然彼に医師になることを期待しますが、彼は初志を貫いて東京美術学校に入

学します。上京した薫造は一時廉平のところに寄寓したこともあり、富士見町教会に出入りしていますが、廉平がアメリカへ留学したときには彼もアメリカ留学の希望を述べて忠告を求めたりしています。結局彼は美術学校卒業後イギリスフランスに留学し、そこで学んだ印象派の技法を取り入れて帰国後は日本の印象派画家としての地歩を築いていくこととなります。大正2年11月に出た広島教会の「三十年史」には、末尾に南薫造の「春光」と題する絵のコピーが1ページ版で掲載されています。瀬戸内の田園風景を豊かな光の中に描き出したもので文展2等賞受賞作という説明がついています。これは薫造が帰国後文展に出品した出世作で、「三十年史」の編者は広島教会出身者の華々しいデビューに目を見張ったのでしょう。彼はその期待通りさらに画家として大成し、後に母校東京美術学校の教授となります。

アメリカに留学した南廉平は牧師になるため神学の勉強を続けていたのですが、明治37年日露戦争勃発の報を聞くや、急遽帰国し、志願兵として戦場に赴きます。愛国心からか、あるいは養父の軍人という期待を思い起こしそれに答えようとしたのか、いずれにせよ、彼の熱血漢としての側面がよく現れています。騎兵中尉として大陸でロシアのコサック兵と戦ったそうですが、無事帰還し、戦後、富士見町教会に帰り新たにキリスト教伝道者としての歩みを始めます。以来植村正久の秘書そして教会の副牧師となり、個性の強い植村の忠実な助け手として20有余年献身的に働きます。その間千駄ヶ谷教会、松山教会、あるいは伝道局の牧師として出向したこともありますが、彼はその生涯の大部分を植村と富士見町教会とのために捧げつくしたと言っても過言ではありません。試練が訪れます。大正12(1923)年9月1日の関東大震災です。会堂ならびに重要記録類を悉く焼失、廉平は震災2日後朝鮮伝道から帰ったばかりの植村を助けて教会再建に立ち上がります。3ヵ月後の12月4日には早くもバラックの教会堂を献堂、さらに次のステップへと前進を期していました。ところがその翌々年大正14年1月8日、植村が突如逝去します。過労心労が重なったためと思われる。植村の死の床のスケッチを薫造画伯が描いていますが、これは廉平の依頼によるものと思われる。威厳のある静かな死に顔です。同年5月、廉平はその後を継いで専任牧師となり、忠誠を捧げて会員を導き、新会堂建設に向けて堅実に歩みを進めていましたが、彼もまた翌大正15年11月7日植村の後を追うように急逝しました。51歳でした。元軍人の

頑強な体格に恵まれ、その死は一様に驚きをもって迎えられましたが、胆石そして胃がんが原因でした。責任感の強い廉平は最後の最後まで苦闘し、主と教会に自らを捧げつくした生涯でした。

廉平の死後、薫造がどのようなクリスチャンとしての歩みをしたかは記録に残っていませんが、娘たちの思い出話として、家ではいつも讃美歌を歌っていたことクリスマスがことさらに楽しかったことが語られています。旅を愛しゴルフを愛する英国風のジェントルマンとして悠然と画業に精励し、また東京美術学校教授として後進の指導に当たったようです。戦争が転機となります。空襲が激しくなった昭和19年7月郷里安浦町へ疎開し、そのまま居ついて、瀬戸内の風景画を描き続け、昭和25年1月脳出血で急逝します。67歳でした。その生家は現在、安浦歴史民俗資料館（南薫造記念館）として一般に公開されています。「三十年史」が掲載紹介した作品「春光」が今どこにあるのか、資料館および呉市で開かれた彼の個展などにも足を運んで調べてみましたが、残念ながら昭和20年3月10日の東京大空襲のとき、彼のアトリエと共に焼失してしまったものようです。

2010年11月28日